

嘉平治
おさが 生玉心中

近松門左衛門作

上 卷

次第今に傳へて老松のく、かはらぬ色を頼まん、其松が枝の宮柱、今に榮へて數萬人、心々の願立に、神のお身さへア、いそもじの、まして流れの憂節や、日毎に替る身の勤め、今日も苦海の神詣で、道頓堀を天神へ、駕籠も一里を飛梅や、社の廻り浮れ出、見渡せば數々の、花屋植木屋立並び、色賣るく花の色賣、我も色賣る身は仇花の、花に價の高下があれば、勤の品もだんくの、品々有もことはりや。花と色とはもと一つ、されば身を賣る金の名を、花代とこそ名付け。先鉢植の作り松、すんと流しの一枝は、太夫の威勢備はりて、悋氣の嵐手管の雨、無理な口説の霜雪も、騒がす痛ます彌増しに、情の縁はびこりて、松の位とたとへられしも憎からず。冷泉春立行ば色失て、さびしき梅も捨られず。是天職の姿にて、一夜流れの軒端の梅の、仇な袂に香をとめて、歌さんさ

心々の願立云々
一 天満宮に數多
の人願がけに來
る故神も忙しい
駕籠も一里云々
一 道頓堀より天
満宮迄一里の道
をさがは駕籠で
詣る、飛梅は管
公の故事
すんと流し一活
花に云詞にて天
地の間に一枝挿
すを流しと云
悋氣の嵐云々
太夫は他の女郎
より悋氣をせら

茶こく—お茶ひく
射干—逢ふにか
く、此章の初め
は傾城の階級境
遇を述べ「思ひ
切れとは」より
あきがの身の上
を説く

一言客—一見客
か
外桶—桐油
こつい客—強い
無骨者

おけ—置けと桶
とかけて桶で
も飲むと也
おか様—主婦次
の花車も同じ

心中の狂言—曾
根崎心中の口上
を述べてみたか
ら其隙に嘉平次
に事告したと也

ないとして見残して、見捨る花や三重恨むらん。色の勤の浮節の、峠を越て伏見坂、戀の
ないにもならひとて、あたり肌を柏屋の、さがは大和の一言客が、今日は天満の社内の
茶屋で、酒と出かけて遊ばん、と一昨日からの揚續け、空も雨氣の駕籠の外桶、賣木の
花に氣を晴し、清水屋にこそ入にけれ。茶屋には待かね、主人エイさが様、駕籠の衆何
として遅かつた。お客様は待焦れ、たつた一人飲でじや。いざ先あれへ」といひければ、
がき「さればいの、こつい客の癖に、揚の日は半時も側に置ねば、損の様に吸付て居たそ
うな。それで勤が續く物か。是駕籠の衆頼ます、私は雨氣で頭痛がして、休んでゐると間
に合せ、盃の相手になつて、日比の手並にいきつかして下んせ」籠昇どつこい氣遣な
されますな。任せておけてもたらひでも飲付てやりませう。はおか様精出して豆腐焼つ
しやれ、鱧も四五本焼つしやれ、冷飯も焼つしやれ」と、からけおろして入にけり。さ
がは主人の側に寄り、「さつきにいふておこした蜷川の、嵐の芝居へ便宜して下んした
か。様子はどふで御座んすぞ」主人何の如在いたしましよ。お前からの書付を其儘持
てやりました。心中の狂言の口上の處、直に觸て囉ふた、と使はとうに戻つたが、も
うお出なさるよ筈。定めし狂言に見とれて、それでがな遅いか」と、いひつゝ炙る豆腐

錦手―五色の模
様ある碗器

わくせき―鬱結

粹―酸いにかく
萬事に委敷人
(皇都午睡)

濱側―河岸

はん―眞實

一文宛云々―天
神様に毎日一文

より、さがが心や焦るらん。假初の薄茶茶碗も名染ては、濃茶茶碗屋嘉平次は、さがが情の錦手に、染付られて親兄弟の、異見も耳に蓋茶碗、深編笠も隠れなく、さがは見付て、「是爰じや爰じや」と、招けばちよこく走、床几に腰を打かけて、側へ寄たい抱付たい。云たい事のわくせきも、主人が見る目憚かりて、他人向なる折からに、奥より聲、何ぞお肴銚子替やや」と手をたよく。花馬あよい」と引のがお定り。蒲鉾梅干粹な花車、氣を通して立ければ、さが「のふ二日逢ぬはどうじやいの」と、顔差入る編笠の、下こそ戀の宿りなれ。嘉平次もなつかしき、「此中は田舎客で平野屋にじやと聞たゆへ、往か戻りに顔見よ、と濱側を有用けに往つゝ戻つゝ、入もせぬ和散買ふたり、心太屋の水機關もそうくは見ていられず、うろくすれば長町側の子共が見知て、「ありやくく東の難波焼が坂町通ひ、柏屋通れば二階からちよいと招く。のつは何としよ」と、悪口いへばあたりからはきよろく見る。親の内へは往かれぬ首尾、出見世にも尻すはらず。いつその事遠かけに、蜷川の芝居の曾根崎の狂言見て、醬油屋の徳兵衛と我等が思ひ引合せ、浮を晴す合點で、其通一筆書て小弁を頼ふで置て來た。其文見てか。今日爰へおじやつたは天神様の御利生。神も佛も名染がほん。親仁の見世の焼物に一文づつでも天神様、お名染

宛上げてゝも馴染
となつた故其手
引であるとなり
扇風呂―天満五
丁目あり(國
花萬葉記)

ゆへじや」といひければ、さか「さればいな、其文見ると嬉しうて、容を勧めて此天満といふ
思ひ付。幸と此清水屋は、私が前方扇風呂にゐた時からの近付ゆへ、爰を頼んで芝居へ
も呼にやりやした。それに付けても父御さんの内方へも、また往かぬ首尾と有。是逢ひ
たい見たいは私とても、ほんにく寝た間にも忘れぬ共、つるには末で女夫に成大願では
ないかいの。其間が互のしんほ。人は次第に身を持上るがほんなれど、扇風呂のさが共い
はれた身が、晦日節季は前垂掛で、裏屋瀬戸屋けんどん屋、三界懸取に歩く様な勤するの
も澤山に逢はふ爲、こなさんが大和橋の濱納屋借ての出見世も、私が近くに居ようため。
念比な宿では断りたて、出見世へ泊りに往く夜さは、女夫所帯をする心。同じ寝るのも
身に付様で嬉しい。され共一度は父御さんのお耳へ入ねば、どうもならぬぞ。聞けば
姉御さん、堺筋の鹽町邊に、縁付してござんすとや。此姉さんなど頼まし、前方から父
御さんに能ふ思はれて下んせ。昨日の晦日も内に居さんせず。譯の悪い評判聞けば頭髪一
筋づつ抜るよよりも苦しうて、氣を揉でももがいても、身は裸なり工面はならず。大方
は四日迄と私が請合置やした。私一人なら死で成としまはぶが、こなさん悪ふ云するが
口惜い悲しい。茶屋の勤する者は、人の小息子唆かし、悪道に引入れるの、不孝者にして

のけると一のけ
るのと歎

りくぎ詩の六
義より出たる詞
爰は道理といふ
位の事

中將姫一横風豐
成の女にて蓮の
糸にて髪茶羅を
織りしといふ人

詰らぬ云々一ぬ
からぬ剛情爺

のけると、十人が十人で町の衆は思はんす。涙が溢れて疎ましい。私可愛が定ならんば、父御さん共姉弟御とも首尾能ふして下んせ」と、涙ぐみたるしんみの詞、更に勤と思はれず。嘉平次もとも涙、「今に始めぬそなたの心底、過分く。ハテたつた一人の父親なり、一ツ屋の五兵衛とて、若い時は男を研き、物の筋道りくぎを立、無理をいふ人でもなく、子共が少し色遊び、五百目壹貫目つかふた逆悔む人ではなけれ共、どう共かう共叶はぬ事が有ぞいの。今迄は隠したが、弟の幾松とおれとか間に、十八に成おきはいふ妹が有。元は在所一ツ屋の叔母の娘、後々は此嘉平次と従弟同士女夫にする約束で、薬の中から養ひ、死なれた母の肝情で、物も書き縫針、綿もつむ機も織る、算用もやり居る。顔も十人並なれど、其方をのけて此世界に女子が有と思ふにこそ。綿をつまふが機織ふが、おきははおろか中將姫の再誕が、蓮の糸で一重羽織おりやるとて、見向もする平でない。され共親の契約、少さい時からいひ名付、今日祝言明日祝言とせがまる。一理屈こねたの。「是親仁様、私や畜生じや御座らぬ。胤腹わけねど兄弟、妹よ兄様といひつとも、夫婦に成は犬鶏のする所爲。男もたてた一ツ屋の五兵衛は、畜生を子に持たといはせては私も不孝、ごなたも一分廢る事。ならぬ」と云破る。そこらを詰ら

ザンド堅い一餘程堅い
負た一借金

生身に云々一生あるものには自然に食を與ふ

謙山一乾山にて尾形乾山の造りたる陶器

はづまう一騙らう、きばらう

ぬ鎌親仁、「チ、こりや出来した、イヤ能ふいふた。ヤイ畜生吟味する根性で、茶屋者とくさり合、親にも知らせず夫婦に成極めして行先が借錢だらけ、人に疎まれ指ささると、是が又人間か。五兵衛が眼には畜生と見へるはい。茶屋者と縁切ておきはと女夫に成迄門詰も踏さぬ」と、打たぬ計の首尾なれば、母屋へとは禁制、姉婿は他人なり、ずんど堅い商人。一人の弟は眼病氣、問談合も誰とせう。いろは茶屋から坂町かけて、負ふた門は七八間、銀高僅壹貫目余り、身を刻んでも當なければ、欠落か自害と思ひ定た所になふ、生身に餌食天道人を殺さず。覺えてか此前、扇風呂でそなたの事で大喧嘩した、西國橋の印傳屋の長作、味な事で其喧嘩から、兩方心底見届、齒の根も喰合ふ念比、彼奴は所帯持なれば、少の取替もしてくる。此長作が肝煎で、中國のお屋敷へ親仁の柵から錦手建山音羽焼の、皿の鉢の茶碗のと、十五六兩が物賣てくれ、晦日にお銀が渡る。請取書ておこせと四五日前に取に來た。定めし昨日請取つる。今日嵐の棧敷に侍衆につるて居た。おれも芝居を立様に、棧敷の裏から音信で、直に爰へ來てくれ、と勞々約束して來た。今では此平に命もくれる挨拶、管違へる男じやない。芝居果に長作が銀持て來るか、爰へもばつとはづもうし、此方の出見世の仕廻は少取懸も有、貳百目あれば

濡かけ―色仕懸

それとも道一夫
とも見知らず
にかく、次句は西
行の歌をとる
飲しこり―飲で
妻中になる
どさくさ―混
雑、次句は葉平
の歌をとる

ざとんざ。伏見坂から道頓堀、壹厘残さず物の見事に仕廻ふて、待て居や節句から面も笠も脱せう。ヤ借錢の笠は脱でも傘は放されぬ、又降て来た。南無三寶あれ見や。あの菅笠著て来る女房、鹽町の姉じや人。目の悪い角前髪は、弟の淺松「さがム、くほんに恰好が能ふ似やした。それく爰へ御座んす。こなさん逢ふてもだんないか」鬻いかなく、佛も見せともない。あの幾松が手を引て来る、腰の太い尻のひよつと出た女子、姉の内の竹といふ食焚。彼奴が見た事聞た事、其日の内に大坂中に事觸れ、此方が取沙汰、何のかのと親仁に告るいやさに、少し濡かけて欺したりや、ほれられ自慢でもう其事を觸れ歩く。それで彼奴が名を筒拔と付て置。そなたも姉の知てじやけな。ア、うるさ、何處ぞにちよつと隠れ」笠、隠れみのなき身の置處、駕籠の雨外樋打明て、二人が膝を組合せ、身を抱合て身を忍ぶ。姉はそれ共道の邊の、濟水が見世に少時とて、「爰借ります」とぞ休らひける。奥には猶も飲しこり、踊るやら謠ふやら、騒ぐどさくさ若草の、妻もこもれる駕籠の中、あられぬ姿顯れて、姉や弟の見咎めん、さがは奥より尋ねんかと、こはさに猶も身を寄せて、締めあふ中の冷汁は、外樋漏る雨の如くにて、肌著も絞る計なり。奥の客がだら聲にて、「こりやさがは何してじや。色が無ふて飲ぬは

さながら一あの
通りの若者と也

い。頭痛がしやうば爰へ来て寝やしやれ。どりやお迎ひに自身お馬を出されふ」と、表へ出るひよろく足、駕籠の者共生の酔、「さがさまく、迷ひ子になつてか。返せくさが様返せ。ヤア爰にか。酒呑むまいとて手が悪い」と、姉に取付手をもぎ放し、雙、エイ狼藉な。さがとやらじや御座らぬぞ。此方や道通り、雨宿りに茶屋の見世へ腰懸れば賣物と思やるか。阿房くさい」と吐られて、皆、南無三寶さがお山と取違へ、愛宕山へ上ろとした。御免く」のちろく目、あたりを見廻し、「扱こそな愛宕山から見下せば、嵯峨は一目に見付たぞ。駕籠から帶の端が見へるぞ。さがを探し出さうか」と、寄らんとすれば、さが「ア、是々、出まするく許さんせ」と、外樋の影より這出て、「こなさん達欺して隠ん坊したれば、つい探し出された其代に、何程成と飲さんせ。何處のお内義様やら龜相な、こらへて下んせ。みんなごんせく」と奥に入れば、嘉平次はさがを放れし嵯峨松茸、選残されし風情にて、駕籠に縮んで居たりけり。姉はもとより商屋の、妻となる身の眼も早く、ちよつと見るより一寸やらず。駕籠なは弟の嘉平次、扱情ない身持かな、引摺出して吐らふ。いやく供の下女が見る處、さながら若い者、人中で恥もかかされまい。身の成果が可愛ひ、父様がいとしひ、おきはが心が無慙な、と様々胸にせ

世話が病—世話
をして苦勞をす
る
たまか—忠實
身躰—身代

めあまる、涙は聲にはやもれて、嬌なふ幾松、そなたは仕合な。よい時に眼を病で淺ましい事も見やらぬ。今のお山が、今日一日は奥の客に身を賣ながら、座敷を忍んで駕籠にかくれて居た躰は、外に深い人に逢ふ手管とやらで有ふが、お山はお山の道にもせい、其深い男は、誰じや知らぬが、有まい事じやないかいの。定て此方の嘉平次もまああの通り。嘉平次の悪性では、お山と相駕籠で外樋の下に屈んで居ようも知れまい。見るも悲しい淺ましい。是といふも親の恩を忘るよゆへ。心もみだらに身を持崩し、人にも人とはいはれぬ。父様や母様に娘は有息子は有。何を不足におきはといふ子を囉ふて、乳母を取守を付、うき世話が病みたかる。少い時から女子の手業も教込、心もたまかに育てあけ、嘉平次と夫婦になしたらば身躰の藥なり、商ひの勝手も能く繁昌もさせたいと、嘉平次が可愛ひばつかりに世話をやんで病み死の、母様の恩をはや忘れ、可愛けにおきはもほんの天竺牢人、見世の若い者共、彼の女子始として、兎や斯う評判する時は、姉が耳へ八寸釘を打るよよりも猶こたへる。若も自然此駕籠に、お山と嘉平次と乗合て居る處、今の客が見付て引摺出して踏とても、何と云譯有物ぞ。見こそせね聞こそせね、定てさいく行先で恥をかきつらふ。其身一人の恥かいの。親兄弟は何になれ、來世の

曲もない一なき
けない
有る事か一有ら
う事か

骨頂一最上

便はなけれ共、あの人のへに迷はつしやる母様がいとしひ」と、慈悲の涙も眼に余る。駕籠に當ての口説言、嘉平次は身も縮み、命も縮る計にて、消も入たき心地なり。幾松は嘉平次が、駕籠に有共氣もつかず。「エ、曲もない兄きの心、今ならでは申さぬが、私が眼病もあの人のゆへ。聞て下され有事か、「おきはと其方と夫婦になれ。其代に家屋敷、商ひの株共に親父の跡を繼する。合點せい」と、道ならぬ事耳かしましく、所詮私が死ぬるか、かたはにして下され、と山上様へ願をかけたれば、御利生で此病。つる時花目の顔すれど、眼は縮線で線るやうで、響いて物もいはれぬ。天満に上手の眼醫者が有と連てお出なされしゆへ、道すがら物語も、とは迄は参りしが、養生はしませぬ。私が盲目になつたらば、兄様の一人して見世の事も取捌、内に身が居つたら、自然らおきはさまと一つになる氣も出来ませう。エ、私等迄身を捨て、是程に思ふとは思遣も有まい。聞へぬ所存な兄きや」と、目を抱へて泣ければ、供の竹がさし出口、「嘉平次様といふ人は嘘つき骨頂。私にもきつうほれて居る。いつぞ日の暮に出見世へ来て、思ひを晴させてくれと、口説つしやるいとしさに、お使の序に寄たれば、今宵は遅れぬ客が有。重ねて此方から便宜せう。心ざし嬉しい」と、錢三十程包んで、懐へ入らるよ。むつと腹が立て来て、「私

てんや者 商賣
女けつかつたーの
よつた嵐―俳優嵐三右
衛門散し大鼓―芝居
のはねの大鼓

つんとーとんと

やてんや者じやないぞや、身を賣る女子じやないぞや。肌ふれねば聞ぬ」と喚いたりや、
 「こりや誠の契りは重て。約束のしるし是じや」といふて、引寄しつほりと頬摺して、「サア
 往ねく」と突出さるよ。私も名残が惜うて、跡視いて見たれば、氣味悪そうに見世の手水
 鉢で、頬を洗ふてけつかつた」と、語れど二人は余りの事、紛らす耳の余所の町、風に嵐
 の芝居果て、散し太鼓の聞ゆれば、南無三寶長作が來ぬ先に、姉も往んで下されかし、と
 飛立計の駕籠の中、今にも來たらば何とせう、のめく共出られぬ首尾、出ねばぐはらり
 と善違ふ。氣を揉でも詮方なく、何御存知なき天神を、俄に頼む計なり。約束なれば長
 作、暖簾の書付見て、「ムウ清水屋は是じやな。少たのも。道頓堀の茶碗屋嘉平次は爰に
 か。約束の通長作が來たといふてたも。嘉平次く」といふ聲に、兄弟驚く其中にも、
 姉は知たる駕籠の中、思遣りては諸共の心づかひぞ殊勝成。さが聞付て走出「ヤア長作
 様久しうごんす」長さがどのか。嘉平次が來るからは、此方も爰にと思ふた。我らは今
 日侍衆の相伴で、嵐の芝居から直に鯉屋へ往く筈で、是袴の躰なれど、嘉平次が何や
 ら内々の一物、今日入らいで叶はぬ持て來てくれといふ。棧敷の事武士の前、おうとい
 ふたが何の事ぞ。つんと此方に覺へがない。嘉平次は何處にぞ。早う逢ふて聞たい」と

追付て―追付戻
ると也、てはで
か

無か―無くば

術ない―仕方が
ない

棚―見世

あつければ―苦
しければ

いへ共さがは姉の前、駕籠に共いはればこそ。さが「いやちよつと彼處迄。追付て御座んしよ。今日入らいで叶はぬとは私も聞たが、あの様の賣物をこな様が取次で、屋敷方へ賣んした其銀が、十何兩とやら昨日渡る筈じやけな。請取も往つて有との事。大事無か私に渡さんせ。左無か先少酒でも呑で待んせ」と、いへば長作、「ヤア〜大それた事いひますの。酒處で御座らぬ。エ、いかに身が術ないとて不器用な氣に成おつた。如何にも賣物は取次、銀高壹貫貳百三十日代、拾六兩糙に彼に手渡しして、則自筆印判の請取を握てゐる。地躰是は丸之助橋、親五兵衛の棚の賣物。銀はおのれが使ふて、親の手前の算用立たず。此長作を横道者にせうとは、底意の怖い盗人。此物騒の世の中、此方の所も裏は野じや。内の勝手は知てゐる。必用心さつしやれ。身があつければどの様な事仕様も知れぬ」と、眞顔の云分。さがははつと色違ひ、兄弟は猶身にかゝる難義を察して駕籠の中、くはつとせき上げ身をもがき、鼻エ、無念やかたられた、姉の手前が恥かしい。いつそ駈出踏で腹をいよふか。出ては姉の恥辱か。早ふ歸つて下されかし」と、千萬碎く氣の働。胸の吹子に怒の火炎、駕籠も揺めく計なり。長作駕籠には氣もつかず、「是さが殿、驚く事ではない。地躰あの氣な生れ付、それを知らずに仇惚して、此長作は

なめすぎた―無
禮極る

もえ様―おかし
様

捨られた。慘いぞや〜。なんと元へ戻して、おれが念比してやるふか。嘉平次などとは違ふた。十貫目や拾五貫目は手の悪い事せず、見ん事今でも〜じや。此方も憎かろ筈がない」と、しなだれ寄て手を取れば、さかア、いや〜、なめすぎた置んせ。あれ町の御内義様も見て御座る。勤の者はあんな者かとさけしみが恥かしい。たとへ平様が盗人で有ふが、強盗で有ふが、いとしようて〜命をやつた此さがじや。何程此方が佛程正直でも、顔も見たふないわいの「長サア先一旦そういはねば譯が立ぬ。それも此方に合點じや。今に嘉平次が大盗人仕をつて、一ツ屋の五兵衛、鹽町の姉が首にも繩付、其身は此方の裏の西の方に烏のとまつた様に、首計になつた時、長作様念比しやうといはふより、今思切たれば、彼奴も仕合此方も徳。どれ前の様にむつちりと肥てか。嘉平次めが吸取たか。肌を見たい」と懐へ手を入る。取て突退け、さか「小見ともないおかつしやれ。いひにくけれど此さがと、平様とは一心づくで逢ふてゐる。こなたの様な口前ではないぞや」と、おろ〜涙の腹立聲、嘉平次はもう是迄、堪忍袋も破れかぶれ、飛で出んとする處へ、姉の内より迎ひの丁稚、大息ついで、「申おる様、ちやつとお歸りなされませ。早ふ呼で來い、と旦那様は門に出て待て御座ります。はやう〜」とせきか

公界一人中

構へて―注意し

付届―揚屋へ時折に與ふべき

つくなや―せつない、苦し(個言集)

中使―長作をさす
教る智恵云々―
智恵のな(神に)
智恵付ると云語
をとりて知らぬ
者に智恵付るに
いふ

くる。姊ア、心もとないけたまほしい、何事が起つた。こりや爰は公界じやぞ。誰も人

の名はいはず、様子計ちやつといへ。構へて人の名をいふな」と、心のきいたる姊の利

發。使はるゝ丁稚も氣轉者、三角屋敷の親仁様がお出なされて、彼の板圍ひの惣領殿が、

一昨日から在所が知れず、付届借錢乞親仁様も一分立たぬ、お前の留守も合點がいか

ぬ。兄弟の事なれば眼醫者にかこつけ、惣領殿をかくまへたに極つた。姊も共に勘當じ

や」と喚き散して御座りました。それで走つて來ました。ア、つよなや」と息をつく。

姊ア、そんなら住ざ成まい。往ひでは叶はぬ所も有。見捨がたない事もあれど、男も女

も親の命には背かれぬ。殊に夫の呼使ア、女郎様お邪魔しました」と、怪我の振にて

駕籠にはつたと行當り、姊ハア駕籠が有とは氣がつかなんだ。是に限らずうろたへては、

鼻の先な事に氣がつかぬ事が多ひ。商ひ物の請取なら、買主の手へ渡りそうな物が、中

使の手に握てゐるとは、是も氣のつかぬ事」と、教る智恵や天神を、伏拜みてぞ歸り

ける。嘉平次憚る方もなく、駕籠踏散し跳り出、長作が鬻取て引居へ、此嘉平次を盗人

のかたりのとは、何の頼願で吐いた。先は武家方、中取したと思はれては出入がならぬ。

先請取書て渡せ。銀取て遣ふとうまゝと能ふ喰せたなあ。今のは身が姊じや人、駕籠

人かと思ふて—
裏に畜生の意あり

せちがな奴—小
才子

好い中の垣—謎
に好い中に垣せ
上

願を云々—見込
が違ふ

めつかう—眞額

にゐるのも見付てじや。姉の前で能ふ恥を與へた。人かと思ふてはまつた。涙が溢れて口惜い」と、齒齧をなして泣居たり。長「テ、成程姉とは一言で見取た。買主の方へ往べき手形が、中にとまつて有とは、何じや女の猿智恵。先へは此長作が請取して上た。あれは身が方への請取。をのれもせちがな奴じや者。銀も見ずにあたよかに請取をせうわいなあ」轟「エ、さもしい詐偽め。ヤイ銀が欲くば穢い云懸せうより、奇麗に家尻きれいやい。さつてもたくだく、今思ひ當た。嵐の芝居の會根崎の狂言が、面白ふて再々見ると吐したが、能ふ見覺えた。取も直さず油屋の九平次。惣じて狂言淨瑠璃は、善悪人の鏡に成。をのれは詐偽の根本にするか。師匠の九平次より倍越た大詐偽。此春をのれに三百目銀借た。念比の中手形もいらぬと吐したれど、よい中の垣と預リ證文してやつた。それに引續く合點なら差引して算用せい。こりや油屋の九平次、醬油屋の徳兵衛をだました格を出したらば、少と願を喰違よふ。ちよつと手をつけるが最期じやぞ長作」と、腕まくりして捻寄れば、長「ヤアぴこくくするない、わやにしてもさせぬく。手形の銀は手形の通、取所で取て見しよ」轟「テ、三百目の手形に十六兩は得遣まい」長「やるまいとはどふして」轟「先かうして遣まい」と、めつかうほうど喰はする。長「ヤア二才め

打れてゐようか」とぶちかくる。腕捻上ひつくり返せば起上り、むしやぶりついて擲き合ふ。さがはあせて、「なふ喧嘩く」と呼はる聲、客も駕籠も酔潰れ、「させぬく」と割込で、ひよろつく足を踏こかさされ、客さへ人踏だは堪忍せぬ」と、相手がどれやらめつた撲、大道へまくり出、大臣も泥まぶれ、駕籠の者もちんば引、さがは嘉平次かこはんと身を捨て駈廻る。喚く人聲雨の音、三重瀧を流すに異ならず。祝子宮奴棒突散し、「社内の騒ぎ狼藉千萬。出よく」と制すれば、どやくや紛れに長作は、行方なく逸失せたり。茶屋は思はぬ踏立、「はや日も暮た御門がしまる。お客様もはやお立。さが様は大事の身、駕籠の衆早う乗せて往つしやれ。お客様も笠貸ましょか。但お駕籠かりましょか」客いやく、駕籠は錢が出る、只貸す笠を借ぬが損。さがは夜る晝身共が揚、道の間も算用の内、駕籠について歸らふ」と、跣足に成て出ければ、さがは心も暗紛れ、「何としてじや何處にじや」と、見廻せば、ア、悲し、平は鬚もかき亂れ、亂るゝ雨の藤の蔭、濡て立たる味氣なさ。勤とて口惜い、大事の男を打擲かせ、濡しほるゝを見て居ながら、我身は駕籠に乗る事か。エ、儘ならば飛下て、共に抱ても濡う物、と見やれば男も目を合せ、焦るゝ中のうき涙、いとど雨こそしきりなれ。さが「なふ駕籠の衆、先待てや。わしや此

田蓑の島云々
夫木集に「誰か
聞く難波の汐の
みつなべに田蓑
の島の龜の詠
聲」
梅の雨―天神の
梅と梅雨にかく

大和橋―嘉平次
の出店ある所、
渡るの縁に用ゐ
たり
淡―泡
際は素焼の云々
―あきはは空闊
を守る
菖蒲の節句―五
月節句紋日は々
がて其祝日

外樋がうつとしい。身は濡ても厭はぬ。是を爰に捨置て、俄雨に逢ふた人、著て下されば本望。是はさがが囉ふた」と、手を上げて引しほり、疊んでひらりと捨ければ、平は立寄りひろひとり、押戴きて雨に著る。田蓑の島の寡鶴泣て立たる哀れさに、まが「ア、忝ない、寄拾取、押戴きて雨に著る。田蓑の島の寡鶴泣て立たる哀れさに、まが「ア、忝ない、誰かは知らねど能ふ拾ふて著て下んす。私も其下に暫しが程の雨宿り、こなさんも其通、其雨外樋を一樹の蔭、他生の縁で御座んす」と、駕籠は見返る。嘉平次は見送る中に降る涙、無情や神の梅の雨、降隔てよぞ三重別れゆく。

中之卷

心々の商ひも、皆世渡りの大和橋、下水水の淡よりも、色にぞ銀は消やすく、際は素焼の明徳利、今日の菖蒲の節句にも、見世指身皿とやかくと、人も火入や灰吹も、碎けて物や思ふらん。繁昌の地の紋日さへ、更て淋しき五月間。駕籠の者共提灯提げ、嘉平次が見世割る計に叩け共、誰そと咎むる人氣もなく、頻りに叩けば家主、紺屋の若い者共大欠して出合、若誰じややかましい。一年に一度の五月の節句、我人皆休んでゐる。嘉平次殿は晦日前から爰にはいらぬ。二日の晩方ちよつと戻つて、それから影も見せ

毘首羯磨—工巧
を刊る天神
借錢檀—赤梅檀
にかく嵯峨清源
寺の釋迦は赤梅
檀にて作るとい
ふ
信濃紬—その縦
糸は至て細き故
云ふ

られぬ。懸請衆なら、夕べ請ふたがよいわいの。節句しも何事ぞ。惣じて其處は出見世で火を燒事も御法度。母家は松屋町九之助橋の角、一ツ屋の五兵衛殿隠れはない。駕いや懸請では御座らぬ。伏見坂町柏屋のさがと申が、是も二日の夜から見へませぬ。今日で四日、さまざまにしても知れませぬ。こんな所によもやとは存ながら、嘉平次様とは深い中、念の爲で御座る」といふ所へ、利窟臭い白髪まじり、「嘉平次どのはまだで御座るか。歸られたらいふて下され。西國橋印傳屋長作から參つた。手形の銀子不埒につるて、明後日お願ひ申ますと」者者「ア、聞に及ばぬ。爰は出見世の棚貸、何事も存せぬ。本宅へ」と、取合ねば詮方なく、皆東へと走ける。紺屋の者共あきれはて、「なんと清介、此さがといふお山見やつたか。ム、其方は終に見ぬか。さいく爰へ泊りに來た。それはくよい女房。如何にもく嵯峨の釋迦、毘首羯磨の御作といふてもだんない」と、いへば一人が領て、「ム、それで聞えた。嘉平次の借錢檀」と打笑ひ、しむる門口しんくと、川音更て靜なり。世の中に秋果よとて付し名か。今は身にさへ秋のさが、平と二人が二日の夜、身のうきまよにふつと出て、何處をとほく行先の、當もないう駕籠かりの世に、死なねばならぬ信濃紬の糸よりも、心が細く氣も弱く、廣ひ國をも

仕廻物―拂物

やだ―弱點

とてももの事―序

わつさり云々―

賑かに騒らう

兵―剛の者

跡にやうり―跡
退り

二度起た―謎に
二度あるものは

の見世を捨て、何處へぬつくり這入てぞ。書出しやら懸請やら、今宵迄も尋て来る。返答にも困つた。エ、譯の悪いお人じやなふ」幕尤々。京の清水焼にずんと安い仕廻物が有と聞、人に先を越されまいと、俄に上つて漸今朝下つた。日比やだの有此嘉平次、さぞ逆た走つたと評判で御座らふ。親仁も商ひに精出すとていつにない機嫌で、今夜は出見世に泊れといはるよ。何處も首尾に成ました。家主殿の錠そうな。サア錠が有なら明て下され。とてももの事に火も囃はふ。行燈に燈して下され。何かと皆の御苦勞。其代に今度の清水焼には利がある。わつさりと振廻を」と、さがを圍ふて身を反け、此期に成ても口利口、後を見せぬは兵なり。其間に錠明て、若者「是火も燈し付ました。茶でも所望に御座らぬか」と、表へ出れば嘉平次は、跡じやうりして入替り、「もう休んで下され。明日お目にかよらふ。いかふねむたい寝まする」と、はたとさして内より懸錠しやんと縮れば、さがは溜息身を顛はし、「早ふ死でのけたい」と、呷くも只涙なり。表には猶不審を立、小側に打寄、若者「今夜の歸り合點がいかぬ。云分といひ飲込まぬ。清介は親御に此様子知らせておじや」遇まつかせ」と駈出す。若「こつちも是で二度起た。ま一度起るは定の物」と、呷き内に入りけり。嘉平次表に氣を付、「サア向ひの門もしまつた。

三度とてモウ一度は髓なものは

銀の瀬戸—金の工面の難關

三世相—木火土金水に因りて人事を占ふ書

仰顔—仰天

道成寺—安珍清姫の故事

是迄こそ太儀なれ。何處に何の障りもなし。二人が斯う並べば夫婦住居し同然なり。是爰がそなたの内じやぞや。エ、口惜い世間廣ふ内へ入れ、親にも逢せ、町へも廣め、そなたに世帯を打任せ、商ひも仕擴げ、嘉平次が女房は勤の者の風はない、何程の大世帯も捌かねまい女房じや、といはせうと思ふたに、叶はぬ事は叶はぬ物。たつた僅か壹貫目余りの銀の瀬戸を越かねて、浮名を取て死ぬる事、無念なはいの」と齒ぎしみし、頭も上ず泣ければ、さがさればいの、わしとても一日成と父御様に御奉公、姉御様を姑御と給仕へせう物と、明暮の願ひ事叶はぬのみか此しだら。及ばぬ願ひの逆罰か。此前去人に三世相見て囉ひしに、先生で佛前の茶湯の茶碗打割りし報ひ有、慎めとの物語。今思ひ合すれば、こなさんの此商賣を、打破つて身を果す、茶湯の茶碗打割りし、因果が廻り來ました」と、又伏沈み泣居たり。嘉かう成身の三世相、ろくな事が有物か。夜半も過たいざおじや」と、既に出んとする所へ、「嘉平次用が有爰明い」と門たよく。嘉誰じや夜更てやかましい。用があらば其處からいへ」たわけ者親の聲を知らぬか。五兵衛じや明い」嘉はつ」といふより仰顔し、たつた一間の濱納屋を、さがが素振も見せ共なし、何處に隠さん道成寺の、鐘はなけれど卽座の智慧、窓の貫に帯をきつと結び下け、嘉サ

物際―節季の間
際―虎口―原本のま

菅蒲の盃―節句
祝の盃

ア取付てぶら下れ」と、共に手をかけ筒井筒、井筒にあらぬ釣瓶下し、干潟の沼を踏む足も、淵に沈むが如くなり。左あらぬ顔にて、嘉只今臥せる折から、何事の御用がな」と、門の戸明れば、親五兵衛常に數寄の大脇指、「遠慮せず此方おじや」と、手を引入るは養ひ嫁のおきは。思ひがけなき嘉平次、こりや何事が起つた。さがが嘸悲しかろ、と挨拶も何するやら、聲も上洩る計なり。おきはは道々泣たる顔、親も涙を目に一ばい、親、ヤイうつけめ、をのれ商人の又してはく、見世を明て余所歩き。晦日前物際は、武士の軍の虎口ぞい。跡の廿八日より出見世を出、朔日は天満にて阿房を暴ら、大事の五月の節季を捨、今日迄は何處に居た。たつた今家主より知らされし、清水焼の仕廻物買に、京へ上つて今日歸り、親仁も機嫌が能いと、五日にも十日にも、親に顔を何時見せた。さがとやらが顔さへ見れば、親の顔も兄弟の顔も、をのれは見たふ有まい。鹽町の姉が禮に來て、親子兄弟菅蒲の盃する連、今日の節句は嘉平次の顔が見へぬと、うぬが事悔んで可愛や泣て歸つた。去ながら、こりや此おきはが顔ばかりは、否でも應でも一期見せねば叶はぬ」と、いへばおきははわつと泣、「エ、情ない嘉平次様。嫌な物私が無理に添はふといふにこそ。お前の心が不定で、外を家になさるよゆへ、親仁様の御苦勞、一ツ屋の家

慈愍とはどこへ
—どこへ燕せと
いふか
どしやう骨—ど
は罵駈性質也

も立ませぬ。心さへすはつて家を踏へる覺悟なら、おさが様を呼入て、兎角お身の立様に、わしや在所へ戻つて尼に成共成ます」と、道を正して泣ければ、さかは聞より氣も亂れ、「いとしやあのお人も、心の内は妬ましかる。わしが離るよことも否。父御のも尤なり。エ、死にやうが遅かつた。今鹽がさいて来て、此身を取ても往けかし」と、身を悶てあこがるよ。嘉平次は「只何事も親の慈悲、御免」とよりは一言も、泣て俯伏く計なり。五兵衛大きに腹を立、「何事も親の慈悲とは、扱は此親は慈悲を知らぬと思ふよな。チ、慈悲知らぬ。慈悲知らぬ親持たが不祥。此おきはにも親が有。をのれと夫婦の約束で、人の娘を囉ふて、こつちの息子が合點せぬ、そつちの娘を返すと、すぐくと戻して一ツ屋の五兵衛が世間へ面が出されうか。親に恥を與へる子に慈悲とはどこへ。エ、淺ましい根性、二本指を侍、一本指ば町人と計思ふかうつけ者。大小は此胸に有、武士に劣らぬ五兵衛とけふ迄人に笑はれぬ。其世倅がどしやう骨、茶屋の銀負ふて逃隠れ、死でも恥が拔はせぬ。をのれが身はすたつても此五兵衛は立通す。此おきはと夫婦になれ。サアどうじや。サア否か應かの返事せい。いやといふと此脇指。こりや、ハテびつくりすな己は切ぬ人も切ぬ。おきはが母は身が姉、爺は他人。おきはを藝にする替り身が腹に突込で、一

ツ屋の五兵衛が一分立て見せう。サア返事、サア何と」と拔懸て責つくる。おきは柄
 に取付て「伯父様殺事はない。わたしが死ねば十方がすみます」と、絶り止めて泣叫ぶ。
 さがが悲しさ身に迫り、死に手は爰に只ひとり、父御前の目の前で死で見せん、と涙の
 帶、たぐり取付、登んくと心計に力なく、足は泥に引締り、帯は中よりふつと切れ、芦
 邊にどうと落水と共に涙ぞ流れゆく。迎も死身の嘉平次、親の心を休むるは安い事く。
 是一生の孝行おさめと觀念し、囂ハア誤り入て御尤。若氣の至り云替せしを捨難く、今迄
 御心背きは不調法。是より魂入替御意を背かず、如何にもおきはと祝言」と、云へ共
 さがは心を知らず、誠と聞て恨みやせん。死際迄、偽事、親を欺すか勿躰なや、と思へばせ
 きあけ聲吃り、いひさしてこそ泣居たれ。親「いやく今迄幾度かたらされた。其心底に
 極つた證據が見たい」「ハテ證據とて何と致そうぞ」親「チ、證據には今宵直にこちへ來
 て、祝言の盃せい」囂夫は余りな親仁様。申かはした女にもとくと合點させ、何國も
 首尾よふ埒明たせうと、明六日の晝迄待て下され」と、云へば親も打うなづき、「尤々。然
 らば祝言は其上、姉も呼寄せ一家集り盃せう。只今心の定まつた印の盃、一つ飲で身に
 させ」囂否出見世で終に酒飲ず。酒とてはござらぬ」親「チ、そう有ふと思ふて酒は身が

萩燒―長州萩の
産にて黄白の釉
藥あるもの

無明の酒―女に
迷ふ心

持参した」と、羽織の下より一升入の祕藏の瓢箪取出し、「サア親の酌一つ飲」嘉「あつ」と云ふより素焼の盃取出す。親「否々小さい、そちが飲は知つてゐる。鉢でも茶碗でも大きな物で一ツのめ」嘉「さのみ深ふはたへませぬ」どれか是かと茶碗尋る其音を、聞にもさがが袖しほる、露の萩燒大皿出し、嘉「慮外ながら」と受れば、親「てうど飲」と、瓢箪傾け注ぎ懸る。酒にはあらぬ糍の色、花の壹歩のからくく、さらくくくと七八十、皿うづ高く盛あぐる。子は惘れうつかりと、親の顔のみ打守れば、親は「わつ」と聲を上、親「やれ慈悲知ぬ親の酒を見よ。誠の慈悲の味はひを吞みてしれや」と泣ければ、嘉「ハア、有難し」と計にて、親の膝に打もたれ、聲も惜まず歎きしは、性は善成涙なり。包むに余る親心、「不便や可愛や此春より、うろたゆる躰を見て。此酒一獻飲ませたく、幾たびか思ひ寄せたれど、否く氣の定らぬ間は却て毒酒と扣たり。此酒飲で方々の恥辱を雪ぎ、無明の酒の酔醒ませ。身共は年寄氣じやうにて、病といふ事知ね共、五六日は己ゆへ胸も痛んで不食する。兎角人の親には病と成も子の心、薬と成も子の心。今宵の異見を聞入て、彌心を持直し親の薬と成てくれ。長生したいと思はね共、せめて卅二三迄とつくと見立、人になして死ねば樂じや」と咽返り、成人の子を引寄せて、背中を撫て泣くどく親の心ぞ哀成。

をよらざー寐ら
れず

ぎえんー縁起

睨けばー覗けば
しみづいてー深
くぬるゝをいふ

嘉平次も人々の心の中を思ひやり、一言も無さしうつむき、落る涙は盃の是もうへこす計なり。おきはも涙にくれながら、「晦日の夜から夕邊迄案じて一日もをよらず、お心疲れお身の毒、歸つてお休みなされませ」親ヲ、歸らう是嘉平次、此脇指は死んだ母と身共が祝言の時、鞆引出物として舅より囉ひ、枕元の守刀と爲たる故家内に何の怪我もない。ぎえんのよい脇指、今宵は身共がおきはが親に成替り、鞆引出に取すると、仇とはしらぬ凡夫心。親「サア今宵こそ早歸つて明日の書迄緩りと寝よふ。やい嘉平次埒明次第起にこい。明日顔見よう、さらば」と立出る。さらばは誠のさらばにて、明日見る顔は死に顔の、生顔見るは親と子の、是ぞ此世の別れ成。嘉平次は親の影隠るゝ計見送つて、内に駈入り窓の下、睨けばさがは消入計、泣しみづいて音もせず。親「是々萬事皆聞てである。忝いと云はふか、悲しい事と云はふか。是で結局嘉平次が、親の冥加に盡るわいの」さが「否々そりやこなさんの不孝と云ふ物。今の酒とは銀そうな。どこも首尾よふ仕廻ふておきは様と夫婦に成、親御の心を悦ばせて下さんせ。私獨死ぬれば濟。どの道からどう云ふても、只こなさんがいとしい。悪ふ聞て下んすな」と、眞實見へたる涙の跡。親「ア、ひとり死なせてよい物か。囉ふた一步は百計、銀さへあれば何談合も仕易い。譬

究竟一力強きも

わせた一もはしたの轉

十六兩云々一十六兩唯取られそ

しやら臭い一生
意氣な

どふなれば迎、そなたを捨ておきはと添ふ氣は微塵もない。南無三帶が切わたか、表から廻つておじや。勝手しるまい連にいかふ」と、表を明て出る所に、印でんやの長作究竟の者連で、長「ヤア嘉平次、親五兵衛は爰にじやけな。逢たいく」嘉「譯もない長作何時じやと思ふ。親仁が爰へいつわせた事が有。用があらば明日成と明後日成と、松屋町へ入るて逢へ。歸れく」と押出す。長「是何ンとする。親仁に逢もそちが用。内々の手形の銀子不埒故、明後日お願申と斷に越たれば、松屋町へいけと有。夫故自身いつたれば親仁は是へわせたと有。千も萬も入ぬ、銀戻すか戻さぬか」と、無躰に内に入れば、嘉平次先へ駈込で、壹歩を隠さんく、と皿の上に中躰踞、前打合せ合せても、膝、合より顯はるゝ金は金にて銀ならず。長「ヤ嘉平次見事な。町人は神供共主君共、額に戴く壹歩を、股に挟で股が冷よふ。さ程澤山な壹歩を戻すまいとはそりやわやじや。奇麗にしやんと渡せく」嘉「コリヤ長作十六兩たゞしられ、夫がぞもとに嘉平次が、うろたへ始命沙汰に及んだ。お願ひ申さば申上が子細の有此壹歩、粉にはたかれてもやる事ならぬ」長「ヤ、此長作が粉にはたかれても取て見せう」嘉「ヤアしやら臭い、常々の嘉平次とは違ふた。口廣事云ふと思ふな。命を先へ出して置て取て見よ」長「ヤ、取て見せう」と、掴み付手

まつかせーよし
きた
五重塔西行法師
―皆陶器製の品
けづめ―足蹴に
されるにかりた
り
ちみどる云々―
血途にてちんが
いは血にあゆる
の轉語

どやくや―混雜

岩をこし―岩て
涙川をとむる
番―三十六番神
ぐしやう神―俱

をむんずと取、見世の小角へはつたと投付る。起上つて組付を「まつかせ」と引抱へ、上に成下に成、見世の焼物皿茶碗、花入粉微塵、五重の塔、西行法師も痛手を負、ちやほの鶏飛でちり、けづめに蹴られて長作が、轉ぶ所をどうと乗、備前漆にて天窓の鉢、覺えたかくと、打碎かれて錦手の、目鼻血みどろちんがいに、長「嘉平次の生盗人、出あへく」と呼はつて、闇に紛れて逃失せけり。嘉「エ、嬉しやく」と一期の本望とけたぞ。親の御恩の壹歩を、己にのめく取れふか」と、見れ共く皿打明て壹歩はなし。嘉「ハア、今のどやくやに同道あが擱で走つた。サア嘉平次死物狂ひ一寸もやらふか」と、囁ひし脇指ほつこんで、駈出んとする所に、紺屋の手代若者とやくと門口に、「嘉平次殿あんまりな。たまたま歸つて何事仕出す。兎角評議は明日、一足も出させぬ」と、外より門口はつたとしめ、「夜明迄張番」と、棒突並ていごかせず。嘉「譯を聞いて下され」と、ことはつても佗ても、斷立ねば男も立す、一分立ねば壹歩もなし。「死ねく」と來る死神の、引手は爰ぞと窓の子を、踏へてひらりと飛所を、涙の袖にひつたりと抱留て、嘉「どふぞいの」嘉「どうとは死ぬるばつかり。足音しやんな泣聲すな」と、身より餘りて涙川、堰も止めよ岩をこし、番は閻魔ぐしやう神、紺屋のもがり劔の山、先には死出の大和橋、踏むは三途の泥の海、

生神にて常に人の肩上に居て其人の善惡の所業を記録する男女の二神
もがり―紺屋の物干

西を後に―極樂は西にあればいふ
利劔即是―利劔ハ即ち是レ彌陀ノ號、一聲ノ念ニ罪皆除カル(般若讚)
かゝる契―戀るに斯るをかく掘詰―はうるにかく

人玉―人魂

迷まよひこがれて三重

嘉平次おさが道行 下之卷

南無阿彌陀なむあみだく、南無阿彌陀佛なむあみだぶつなむあみだく、南無阿彌陀佛なむあみだぶつ南無阿彌陀佛なむあみだぶつ彌陀く、南無阿彌陀佛を頼たのても、西を後に歩あゆみ行極樂淨土ごくらくじやうどに背そむく共、利劔即是りけんと聞きく時、死しする刃も彌陀の縁えん、南無阿彌陀佛の聲細こゑほく、心細こゝろほさや來世迄らいぜ、かう手てを引ひて行ゆく事か、若もしや離はなれはせまいかと、引合ひきあし手てを引寄ひきよせて、猶抱なほだ締きめて泣なき盡つくす。今日けふの祝いわひの菖蒲あやめの露つゆも、我が袖そでには憂うれはしや。つらや端午たんごの紙職かみのほり、神かみにも世よにも捨すてられて、菖蒲刀あやめがたなの切先きりさきにかゝる契ちぎりの惡縁あくえんと、返かへらぬ道みちを辿たどり行、涙なみだの雨あめに星消ほしきへて可愛かほひそなたいたいといい殿御どのご、顔かほも見みせぬか五月ごご闇くら、命いのちも世よをも我身わがみをも、今いま一時ひとときに堀詰ほりづめの、あれ井戸いどにも女め夫とこ有あはひの。そちも妹脊いもせは替かはらねど、こちは釣瓶つるべの繩なは切きれて、横よこに行切道筋きりゆきみちすぢの、是こゝ六道ろくだうの新道しんみちと、花はな屋やが辻つじにしよんほりと、うき數々かずかずを今宵こんよひしも、數かずへ盡つくして下寺町したでらまちの、後夜ごやの響こゝろも身みにしみじみと、今いまぞ二人ふたりが一生いっせいの、夢ゆめの寐覺ねざめを松屋町まつや、是こゝが父御ちちごの通とほりかや。我が生なれも此筋こゝろの、親兄弟おやきやうだいも此身こゝろとは、しらで夢ゆめをや結むすぶらん、結むすび留とどめてもとまらぬは、わしが人玉ひとたま

遊山所—生玉の
 境内は見世物な
 どにて賑はし
 いさめ—勇まし
 くする
 太平記—太平記
 理書抄を讀みて
 錢をとるもの
 冥途の友—時鳥
 を死田の田長と
 いふより云（比
 古遊衣）
 それ覺えてか！
 嘉平次がまだに
 いふ詞にてまだ
 覺えてるか也
 堅手—頑固
 貸す—遊女が客
 に買はれ、行
 く、貸ふは客に
 請て他の席に出
 る
 辨財天—生玉に
 祀あり
 むはへて云々、
 追ひかけて来た
 と北向

生玉坂の、草にやつると白露を、あこがれ出る玉か連、拾へば消る初螢、夜ルは思ひに
 燃れ共、晝は名にをふ遊山所の、貴賤群集の伊達盡し、人をいさめの藝盡し、茶やが
 藁屋の軒續き、竹の柱に節込し、稽古淨るり太平記、琴の連歌引替て、松にはけしき
 雨風や。我は初音か時鳥、冥途の友と鳴連て、いとどしほると袂かな。それ覺えて
 か此春の、花の紋日を此床で、二人寢覺の小盃、そなたま一つおれ一つ、さはる手元
 に萬歳が、あいも興有相の山。花は相山散ても根に返る、人は返らぬ死出の山、死し
 て返らぬ道ぞとは、今のうき身を諍ひしか。三途の瀬戸の焼物盡し、親は堅手の茶碗と
 茶碗、我疵付て我と我、名をや流さん恥しの、我が噂も明日よりは、歌祭文を身の上
 に、サイモン、坂町邊のな通り筋、柏屋内におさがとて、年は廿の、ヨイ花盛り。客衆客
 衆の揚つめを、貸すの囃ふの暇無き、つらい勤の中に扱、深い願ひは一ツ屋の、嘉平次
 ゆへに身をはめて、替るまいとの七枚起請、書て二人が取替す、小指の血汐杉原に、押
 て心のみかきもり、衛士の焼火と品替る。かの小林が舞扇、是も浮世のウタイ形見こそ、
 今はあだなれ松風や、無常の風も立騒ぐ、辨財天の鰐口の、鰐の口より恐ろしき、追手
 の聲のあれくく、おはへて爰に北向の、八幡宮の燈明も、をのれとしめり行先は、

鬼踊一寺の前にて鬼の面被りて踊る

臨終の云々一
念五百生懸念無
量劫(智度論)
思ひよふた一思
合うた

罪業の程思はれて、呵責恐し鬼踊りの、寺の藪垣物凄く、身を慄はしてぞ立にけり。さがは涙にゆきやらす、「のふ夜明に間も有まいが、何處で死なふと思ふてぞ」驚テ、馬場先の松原を最期場と心ざし、來事は來たがあれ見や、星さへ一つない雨空。たとひ奇麗に死んだり共、血汐の躰を雨にうたれ、むさい穢ない死に顔と、笑はるゝも口惜しい此茶見世を最期場に極めん」と、羽織打敷座を組ば、共に寄添ふ床の上、驚「サア今が最期ぞや。臨終の一念は無量劫を引と云ふ。なんにも心に懸らぬの」さが「ア、くどい事、思ひよふたこなさんと、一所に死ぬる私じやもの、浮世の本望遂たれば、思ふ事も悔む事も露程もないわいの」と、いへば平は猶泣出し、「そこをいはふといふ事。今死ぬる今迄も我は親の顔を見る。親兄弟の事計、云ひ續けて我は死ぬるぞや。そなたも父母持た身、けふが日の最期迄、父共母共いひ出さぬは我に未練を見せまい爲。嗜み深いそなたじやと思ふて涙がこぼるよ」と、語ればさがはわつと泣き、「忘れていた物ひよんな事。母様ゆかしうござんす」と、男にひたと取付て、聲の下行涙の流れ、袂に溜る哀さよ。驚「テ、でかしやつた。いふて仕廻ふは懺悔の一つ、罪を助かる種共成。サア夫婦が親の事いふ其詞を冥途の引導、一時も急がん」と氷の刃するりと抜、既に血汐と鹽町の晶つたひ

寸善尺魔―善事は少く悪事は多い

下主の云々―詔にて悪な者は事後に氣がつくしんろかる―せつなかる―鉄をぬかした―ぼんやりした

たをれ―損耗

に、屬あれ誰やら、南無三寶見知の有柏屋の灯燈。サア寸善尺魔いかどはせん」と狼狽ゆる。さがは賢く茶見世の圍ひ、葭簀廣けてぐるぐる。平もぐるぐる。卷に、二人簀卷の妹春川、流れの智恵も才覺も、今宵限りのうき身かな。親方柏屋半兵衛、小弁諸共方々と尋かね、半エ、下主の智恵は跡から、紋付の灯燈で尋ぬるは無分別。さぞ小弁もしんろかる。をれも鉄をぬかした。爰で暫く休まふ」と、蠟燭消て立寄るも、同じ茶見世の床の上、夫と知ぬぞ是非も無き。小弁しくしく泣出し、「いとしやさがさんどふしてぞ。傍輩といひ姉女郎、ほんの姉さん妹と、兄弟の契約してあのさん便りに勤めたに、若心中など仕て死なんしたら、私や木から落た猿。親方さん頼みます、早ふ尋て下さんせ」と縋り付て泣ければ、半「ヲ、やさしい事よふ云ふた。親方の身になつて見い。可愛計かさが死ぬると大きなたをれ。年の廻り合せで損するも有事。夫は絲瓜共思はぬが、聞えぬは嘉平次。此半兵衛を男でないと思ふたか。さがを連て退手間でおれが内へ駈込、まづこうくした首尾で死なねばならぬ難義、男と見懸て頼むとたつた一言云ふて見い。人にも知られた柏屋の半兵衛、いや知らぬといはふか。ほんにやれく家財賣ても救ふ心底。胸の扉に鑑がなふて無念なはい。ア、是も跡へん、今云ふて返らぬ事。さあ小弁、中

歸る柏屋―歸る
は半兵衛止るは
嘉平次なり、嘉
は簀巻になれば
柏餅に似たる故
云ふ

高で身を云々―
頭から身を棄て
て此處へは來な
いとなり

寺町から藤の棚、ま一ぺん尋ふ」と云ふ所へ、西東より大勢つれ、「あの茶見世に泣聲はさがと嘉平次。サア仕てやつたぬかるな」と、ばらくと立懸り、半兵衛小弁にむさぼり付、「死なば嘉平次ひとり死ね。大事の奉公人よふ殺さうと仕たなあ」と鬨取るやら引張やら、灯燈上て顔と顔、町人「ヤア半兵衛でないか」半「町の衆か」町人「エ、優長な、人に世話をやかす事じやないわい。さがが事を仕出せば、損といひ大きな町の騒じや。サアたてたて」半「いかい皆の苦勞じや。草臥た上に小弁がめるく泣ので、共に氣が落て来て少爰で休んだ。どふでこいつら死のふはい。つんと足が進まぬ」と、歸る柏屋止る柏、命枯葉の夜嵐に、又東西へぞ別れける。人影なければ嘉平次も、さがも葭簀ほどいて溜息つき、嘉「今のを聞てか」さが「聞やつたか」嘉「半兵衛が情の詞、エ、男じや過分な」さが「小弁が優しい心ざし」忝いと嬉しいと、胸に余れば聲にもる、二人が歎ぞ至極成。嘉「ア、何のかのと隙どる程涙の種。サア今じや念佛申や」と引寄れば、さがは「わつ」と泣出し「まぢつとく、まあ待て下され」と前後不覺に取亂す。嘉「待てくれとは命が惜うなつて來たか」さが「ア、今になつて愛想づかしいふて下んす。命惜いほどなら高で身をうつ事もない逢。初めてけふが日迄、烏の啼ぬ日はあれど、顔見ぬ日もなかつたに、死ぬる今夜に限つて顔

夏草―無いにか
石の火―電光石
火の意をとる
しげ糸―粗雑な
綱糸

のり返る―そり
かへる

拘帯―夫婦抱く
にかく、扁平次
顔を包み嵯峨の
扱帯にて縊死せ
しとなり

さへ見えぬ雨空、未來の暗さが思はれて、夫が悲しうござんす」と、歎けば男も涙ぐみ、「ヲ、道理、我とても今生の名残、ま一度顔も見たけれど、燈とては夏草にせめて螢の影でもほしい。ヲ、思ひ當りし」と、小石拾ふて脇指の、鑿を火打の石の火の、光待つ間の命の樂み。下緒の房のしげ糸を、ほくちとなしてかちくく、かつしと打て吹付る、火影も息も幽にて、互に見替す顔と顔、「永い別れになつたか」と、わつと計に絶付、大聲上て歎きしは理り責て哀なり。既に明行鳥の聲、泣々胸を押廣け、さが「サア何にも思ふ事はない」罵ヲ、でかしたく」と、抜たる脇指取直し、「南無阿彌陀佛」とさし通せば、うんとばかりのり返る。ぐつとゑぐれば手足をもがき、又さし通せば身を悶へ、ゑぐりくりく、目も眩めき、娑婆に出る息絶果て、終に冥途に引入たる、敢なき最期ぞ衰成。死骸を繕ひ血刀よつく押拭ひ、同じ刃と思へ共、守にせよとの親の譲り、此刃に死するは最期の不孝。二世迄夫婦抱帯、契りは先の世く迄も、重ねる床の竹すがき、死顔見せじと押包む、羽織も空も黒羽二重、床几をがはと踏はづせば、色も變じて目眩き、忽ち息は絶てける。惜や五日の花菖蒲、花の躰を血に染て、戀の刃に伏見坂の、世語りとこそなりにけり。

